

甲虫コレクションガイド 19 群馬県立ぐんま昆虫の森の甲虫コレクション

金杉隆雄・茶珍 護

〒 376-0132 群馬県桐生市新里町鶴ヶ谷 460-1 群馬県立ぐんま昆虫の森

Beetle Collection of the Gunma Insect World

Takao KANASUGI and Mamoru CHACHIN

はじめに

群馬県立ぐんま昆虫の森は、2005年8月に開園した昆虫園である。施設には約40haの敷地があり、雑木林や水田・畑、草原などのフィールドが広がっている。建物としては昆虫の生体や標本を展示するとともに、温室の中を蝶が舞う昆虫ふれあい温室が付帯している昆虫観察館本館(図1)、約2万冊の蔵書を有するフォローアップ学習コーナーや実験室、ミュージアムショップのある昆虫観察館別館、温室に放すチョウを飼育するための食草・育成温室、明治初期の養蚕農家を移築したかやぶき民家などがある。昆虫園であることから生きた昆虫の飼育展示が主体となっているが、標本も昆虫観察館本館2階の展示室を中心に展示している(図2)。

標本を保管するための収蔵庫は、昆虫観察館別館地階にあり、床面積は約130m²である。収蔵庫には木製の標本棚60棹(寸法等が異なる規格の棚も含む)以上があり、現在のところ約1,900箱のドイツ箱が収納されている(図3、4)。昆虫標本の収蔵数は針刺し・マウントされたもので12万点以上ある(2020年3月末現在)。この他にも三角紙やタ

トウ状態のものをはじめ、水生昆虫や微小昆虫の液浸標本やプレパラート標本もあり、総数は把握できていない。

収蔵されている標本は、ぐんま昆虫の森および周辺地域で採集されたものや購入、寄贈により収集されたもの、職員が群馬県内の調査(良好な自然環境を有する地域の学術調査:群馬県自然環境課、群馬県尾瀬保全対策事業調査:尾瀬保全推進室など)によって収集された標本などからなる。なお、本園の昆虫コレクション全般に関しては、金杉(2012)にまとめられている。

ぐんま昆虫の森の甲虫コレクションの概要

群馬県立ぐんま昆虫の森の昆虫コレクションのうち、甲虫標本は全体の約4割を占め、48,000点以上ある。これらは開園前から主にぐんま昆虫の森の園内および周辺地域を含む群馬県内などにおいて職員等により採集されたものや寄贈、購入等によって収集された標本である。

職員等によって採集された標本類の特徴としては、ぐんま昆虫の森のフィールドである里山環境で採集されたものが多いことが挙げられる。また、



図1. 昆虫観察館本館の外観。



図2. 里山の昆虫の常設展示。



図3. 収蔵庫の様子.



図4. 標本の収蔵状況.



図5. コガネムシ科の収蔵標本の一部.



図6. 水生甲虫コレクション (ヒメドロムシ科の一部).

尾瀬ヶ原のような国立公園の特別保護地区や県自然環境保全地域など、通常は採集等が制限されるエリアの調査によって得られた標本が含まれており、地域の甲虫相を把握するための資料として重要である。

後述する水生甲虫や寄贈等のコレクションを除くと甲虫コレクションの点数はあまり多くないが、主なものとしてはクワガタムシ科、コガネムシ科(図5)がそれぞれ約1,100点以上、カミキリムシ科が約2,000点、ハムシ科、ゾウムシ上科各約800点などが挙げられる。クワガタムシ科に関しては日本産全種全亜種の8割以上の41種49亜種を収集保管している。

水生甲虫コレクション

群馬県内では水生甲虫を専門とした研究者が不在であったため、近隣県に比べて調査が遅れていたが、著者の一人である茶珍が数年前より群馬県内を中心に水生甲虫の調査を行っており、その成果の一部がまとめられている(茶珍, 2015)。また、

地元公立大学と連携した調査やプログラムの一環として昆虫の森園内の水生昆虫調査を行っており、これらの調査により水生甲虫の標本が蓄積されている。これまでにヒメドロムシ科約3,900点、ゲンゴロウ科約700点、ガムシ科約500点、ダルマガムシ科約300点など計5,700点が収集されている(図6)。

八坂允(やさかまこと)コレクション

八坂允コレクションは、故八坂允氏のご遺族から寄贈された甲虫標本コレクションである(図7)。八坂氏は1999年に横浜市から群馬県渋川市に移られ、その頃より群馬県内の甲虫類を中心に精力的に採集された。残念ながら八坂氏は2005年に急逝され、群馬県に移られてから活動された期間は数年間だけであったが、多数の甲虫類を採集された。そのコレクションは未整理状態ものがほとんどであったが、県内の甲虫愛好家である金井直樹氏らによって整理・マウントが行われ、さらに県内外の甲虫研究者によって同定されてまとめられた(堀



図7. 八坂允コレクション（ハネカクシ科の一部）。



図8. リョウモウナガゴミムシのパラタイプ標本。

口, 2009a, b; 金井, 2009, 2010, 2011, 2014a, b; 村田, 2011, 2012a, b; 須田, 2009; 渡辺, 2009 など)。八坂コレクションは群馬県内の甲虫相解明に大いに貢献した標本といえる。このうち、主に金井氏が整理した標本約 21,000 点が本園へ寄贈されている（図6）。主なものとしてはハネカクシ科約 2,800 点、ケシキスイ科約 1,700 点、ジョウカイボン科約 1,200 点、ゴミムシダマシ科約 1,000 点、カミキリムシ科約 1,800 点、ハムシ科約 2,500 点、ゾウムシ科約 2,500 点などが含まれる。

赤城自然園コレクション

赤城自然園は群馬県渋川市の赤城山北西斜面に位置する民間の自然公園である。ここでは 1980 年代から 1990 年代にかけて昆虫を専門とするスタッフが配置され、園内の昆虫の調査・標本収集が行われていた。2000 年に諸処の事情から昆虫専門のスタッフが不在となり、昆虫標本が管理できなくなるといことで、開園前の本施設で収集された標本を引き取るようになった。赤城自然園のコレクションは昆虫全般で約 18,000 点あるが、この中に甲虫類 13,000 点以上が含まれている。赤城山南東部に位置するぐんま昆虫の森で得られた標本と併せれば、赤城山の甲虫相を俯瞰できるコレクションといえる。

タイプ標本

甲虫類のタイプ標本としては、群馬県東部から栃木県南西部に生息し、2007 年に記載されたリョウモウナガゴミムシ *Pterostichus ryomoensis* Morita et Suda, 2007（図8）、ノコギリクワガタの鹿児島県三島村の黒島亜種であるクロシマノコギリクワガタ *Prosopocoilus inclinatus kuroshimaensis* Shimizu et Murayama, 2004、ネプトクワガタの鹿児島県トカラ

列島の中の島亜種であるナカノシマネプトクワガタ *Aegus subnitidus asaii* Murayama et Shimizu, 2004 のパラタイプ標本が保管されている。

その他

上述以外に展示用として主に購入によって収集された外国産の昆虫標本がある（図9）。チョウ目やカメムシ目（ツノゼミ科）などの標本が多いが、甲虫標本も含まれており、主なものとしてはオサムシ科約 300 点、クワガタムシ科約 460 点、コガネムシ科 550 点、タマムシ科 300 点など、約 2,100 点がある。

また、現在のところ未整理状態であるが、群馬県館林市が市史編纂のために動植物の調査を行い、その際に採集された標本が館林市から本園に寄贈されている。甲虫を中心とした昆虫類は、栃木県足利市在住の大川秀雄氏が調査を行っており、オオルリハムシなど県内では生息地が限られる湿地性の種が含まれている。本調査で得られた種類については目録としてまとめられている（大川・内山, 2006）。



図9. 外国産甲虫等の常設展示。

おわりに

以上、群馬県立ぐんま昆虫の森の甲虫標本コレクションについて紹介したが、最後に現状の課題について少し述べたい。まず、標本整理やデータ登録などの標本管理にほとんど時間が取れないことである。標本管理の担当職員は1名であり、昆虫飼育や各種プログラム対応、事務作業等の業務の合間を見ながら時間のあるときに細々と作業を行っている状態である。標本整理に関しては概ね分類群毎にソーティングされているものの、甲虫類のデータ登録に関してはコレクション全体の1%にも満たない。鱗翅目についてはチョウや蛾に詳しいボランティアに協力していただきながら、整理やデータ登録を進めているが、甲虫類をはじめその他の分類群については協力者が見つかっておらず、同定やデータ登録が進んでいない。また、多くの施設と同様に収蔵スペースが少なくなっている。このような状況であるが、今後も地域の昆虫に関する中核施設として群馬県内の資料を中心に収集を進めていきたいと考えている。

謝辞

リョウモウナガゴミムシのパラタイプ標本を寄贈していただいた須田亨氏、故八坂允氏のコレクションを寄贈していただいた八坂翠氏、八坂コレクションを整理するとともに本園への寄贈に御尽力いただいた金井直樹氏、それから、執筆の機会を与えていただいた福井大学の保科英人博士および倉敷市立自然史博物館の奥島雄一博士に御礼申し上げます。

引用文献

- 茶珍 護, 2015. 群馬県産流水性甲虫類の分布記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (18): 231-249.
- 堀口 徹, 2009a. 故八坂允氏採集の群馬県産食葉性コガネとクワガタ類. 乱舞, (18): 121-123.
- 堀口 徹, 2009b. 堀川正美氏同定の故八坂允氏が群馬県で採集したゾウムシ類. 乱舞, (18): 124-127.
- 金井直樹, 2009. 故八坂允コレクションの甲虫—その1—. 乱舞, (18): 60-99.
- 金井直樹, 2010. 八坂允コレクションの甲虫—その2—. 乱舞, (19): 42-91.
- 金井直樹, 2011. 八坂允コレクションの甲虫—その3—. 乱舞, (20): 15-92.
- 金井直樹, 2014a. 故八坂允氏採集の甲虫—その4—(ジョウカイボン科). 乱舞, (22): 24-32.
- 金井直樹, 2014b. 八坂允コレクションの甲虫(番外編) 八坂允コレクションのハネカクシ. 乱舞, (22): 33-52.
- 金杉隆雄, 2012. 群馬県立ぐんま昆虫の森の昆虫コレクション. 昆虫と自然, 東京, 47 (8): 24-27.
- Morita, S. & T. Suda. 2007. A new pterostichine carabid beetle from Kwanto, central Japan. Elytra, Tokyo, 35 (1): 287-293.
- 村田元彦, 2011. 栗原明雄氏同定の故八坂允氏が群馬県で採集したヒメハナカミキリ属 (*Pidonia*). 乱舞, (20): 121-124.
- 村田元彦, 2012a. 栗原明雄氏同定の故八坂允氏が群馬県で採集したヒメハナカミキリ属 (*Pidonia*) II. 乱舞, (21): 33-36.
- 村田元彦, 2012b. 故八坂允氏採集の群馬県カミキリムシ. 乱舞, (21): 37-58.
- 大川秀雄・内山裕司, 2006. 昆虫目録(トンボ目・チョウ目を除く). 館林市史資料目録, たてばやしの動植物—目録および調査基礎資料集—, pp. 155-219. 館林.
- 須田 亨, 2009. 故八坂允氏採取の歩行虫類. 乱舞, (18): 100-109.
- 渡辺 崇, 2009. 故八坂允氏採集群馬県産ハネカクシ科目録. 乱舞, (18): 110-120.

(2020年4月10日受領, 2020年5月10日受理)

【短報】チャイロマルガタテントウダマシの愛知県および岐阜県における記録

チャイロマルガタテントウダマシ *Dialexia niisatoi* Narukawa, 2017 (Fig. 1) は、東京都稲城市の標本を



Fig. 1. チャイロマルガタテントウダマシ.

基に記載された体長1.5 mmほどのマルテントウムシダマシ科の甲虫である。本種が属する *Dialexia* 属は触角が9節で前胸背板に側溝がないことなどからマルテントウムシダマシ科の他属から識別され(佐々治, 1980), 本邦においては *D.*

niisatoi の他にベニモンマルガタテントウダマシ *D. hisanoi* Sasaji, 1978 が知られる。両種の区別点は, *D. niisatoi* は上翅が暗い茶色で紋はなく, その長さは2枚合わせた幅と等しいのに対し, *D. hisanoi* は上翅が暗い黒褐色で赤褐色の縦紋を持ち, その長さは2枚合わせた幅より短い点である(Narukawa, 2017). これまでのところ本種の記録は原記載以降知られていないようであるが, 筆者らは愛知県および岐阜県において採集しているので報告する。

本報告に使用した標本のうち, 「ONO.」で示したナンバーは大野コレクションの登録番号で, このナンバーを記した標本は, 大野のもとに保管されていることを示す。